

令和八年度

岡山白陵高等学校入学試験問題
(二期)

国語

受験 番号	
----------	--

注意

- 一、時間は五〇分で一〇〇点満点です。
- 二、問題用紙と解答用紙の両方に受験番号を記入しなさい。
- 三、開始の合図があつたら、まず問題が一ページから二二ページまで順になつているかどうかを確かめなさい。
- 四、解答は解答用紙の決められたところに書きなさい。
- 五、字数制限のあるものについては、句読点も一字に数えます。

—
次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ここ三十年間、表現において、わかりやすいことはよいことであった。やさしく、読みやすい文章が①カンゲイさ
れ、議論には具体例を②ソえることが要求された。図版や写真があればなおいっそう喜ばれる。抽象的な事柄を無駄
なく表現したような文章がまるで悪者のように見られる。したがって、文章は知らず知らずのうちに冗長^Aになった。
背後には読者の理解力に対する蔑視が含まれていたわけで、そういう消化力の弱い読者に食べさせるには硬いものは
無駄だ、オカユのように噛まないでのみこめるものでなくてはいけないというので、わかりやすい表現が奨励される
ことになったのだろう。もともと、かつてのあまりにも観念的で生硬な文章に対する反動ということもあった。しか
し、オカユばかり口に行っているうちに読者は③噛む喜びを忘れるようになる。イメージネーションを失った読者があら
われたのである。

そこへもつてきて映像文化の発達が、何でも見られる、あるいは、見たように感じられる世の中にした。英語に「見
ることは信じること」(百聞は一見にしかず)という諺^{ことわざ}があるが、目に見てからでないとわかったような気がしない
視覚タイプの人間が多くなった。文章を読んでもそこからすぐ情景を心に描くのではなく、既往の経験、パターンを
まず連想し、それをもとにして表現に向う、X 先行の認識である。小説や旅行記ならこれでもいいが、言論思想
についても同じやり方でわかろうとする読者があるのは問題である。だから社会面はわかっても社説はわからない。
しかたがないから、思想の表現も暗々のうちに人間関係の枠組みの中でなされるようになる。わかりやすい表現と
いう考えは思いもかけぬ落とし穴^{おと}があったわけだ。

ゴシップやスポーツ記事のわかり方は既知によって理解する方式である。こういう読み方をかりにアルファ読みと
すれば、アルファ読みでは、読者にとって未知の世界のことは理解できない。もしアルファ読みしかできない人がい
るとするならば、その人は自己の小さな経験世界から外へは出^Bられないことになるはずだ。実際にはそういうこと
はごく稀^{まれ}であって、たいていは大なり小なり未知を読む力もっている。この未知を読むのをベータ読みと名づけ
ると、人類が独自の言語文化を築いてきたのも人間にベータ読みの能力があるからだと考えられる。

われわれは、はじめから一足飛びに未知の世界に参入できるわけではない。まず、アルファ読みにある程度習熟して、現実から表現への連絡を確実にし、事物の論理と言語の論理の相関関係を直観的にとらえた上ではじめて、既知から未知への飛翔を試みる。そのとき翼の働きをするのがイメージネーションである。ここでも経験、人間関係のパターンがまったく不用になるわけではないが、より重要なのは言語形式のパターンとそれが表現しうる思考の内容である。

アルファ読みは主として人間的ストーリーによってわかつて行く理解であるから、擬人的思考から無縁になることはできない。AとBとが対立概念であるときにも、これをAという人間とBという人間が敵対関係にあるというような比喻によってとらえがちである。それに対してベーター読みはいわば幾何学的思考である。AとBとの関係に敵、味方という人間関係をもちこまないで、Aと非A、AとマイナスA(B)といったY的関係でとらえる。

具体的でわかりやすい表現を求めめるのに急であつた戦後の文化の中で、ベーター読みは衰微し、抽象思考のおもしろさ、純粹思考の美しさが見失われるようになってしまった。すべてが人間的、あまりにも人間的に表現され、理解されているために、論争というような、本来ならば純粹思考の次元において行なわれるべきことすら、ほとんどゴシップと紙一重の興味でしか受けとめられない。われわれは思想の基盤を失いつつあると言つてもよい。

ここで、アルファ読みからベーター読みへの転換と、それが現代においていかに困難であるかの問題について考えておかななくてはならない。

われわれがはじめて文字を読むことを覚えるとき、それは当然アルファ読みで、音読はその典型的な様式と言つてよい。書いてあることはわかっているが文字がわからない。文字が読めればそれで読みは完了するのがアルファ読みだ。これだけに留まつていてはならないからベーター読みに移るわけだが、いつどのようにしてベーター読みができるようになるのか、個人的にふりかえてみてもはつきりしないことが多い。母国語のありがたいところで、ある年齢に達するとたいいの子供がベーター読みができるようになってくるのはおどろくべきことである。そこには大人の方がい知ることのできない神秘が働いているのかもしれない。教育はほんのすこしその神秘のお手伝いをしてい

るにすぎないから、あまり大きな顔をするのは禁物である。

アルファ読みからベーター読みへ移る飛び石には文学作品がもつとも適している。たいていは物語などを夢中にな

って読んでいるうちにベーター読みを身につけるようだ。昔の親たちは子供が小説を読むことを嫌ったが、そうするとよけいに隠れても読みたいのが人情で、その隠れ読みが未知をのぞくベーター読みの刺激になった。世の中が子供の読書に寛大になって、スリルのあるベーター読み入門のひとつが失われてしまった。同じ隠れ読みでもいまの漫画は絵がついているから、②ベーター読みの手引にはなりにくい。

ところでなぜ文学作品がアルファからベーターへの切り換えに適するかであるが、文学は一応はアルファ読みもでき、深く読めばベーター読みになるという(注1)妙味があるからにほかならない。しかし、それがかえって仇^{あだ}になって、アルファ読みで終始するのがよいという実感尊重主義がベーター読みへの移行を③ソシ^{ソシ}することになりやすい。それで文学少年少女はできて未知を読む読者はついに育てられないことになる。これは文学読者をふやして、一見いかにも文学にとって好都合のようではあるが、必ずしもそうではない。③本^本当^当のベーター読みができない読者を相手にしては、文学も虚構の中を大きく飛びまわることができなくて、現実^{現実}に足をひっぱられがちになる。文学はベーター読みの入口としてすら役立たなくなりつつある。それは文学のためのみでなく、文化全体にとっても由々しき事態であると言わなくてはならない。

(中略)

文字を読む段階に入ってからアルファ読みからベーター読みへの切り換えはなかなか困難なものであって、うまく行かないのは何も現代だけに限ったことではない。教育や文化もそれをいかにして可能にするかの方法論であると言えないこともないのである。母国語はアルファ読みにはこの上ない有効な媒体であるけれども、それがまたベーター読みを妨げる要因にもなるのは④ヒニク^{ヒニク}である。古来、思考の訓練のためには日常の言語を離れる必要があるとされてきたのも、ベーター読みが母国語だけでは完了しにくいことを暗示している。

母国語に比べて感覚的理解の乏しいと思われる古典語や外国語がベーター読者を育てるのに有効な方法になることは、歴史が長く実証してきたとおりである。母国語はあまりに具体的でイメージや情緒がからみついていてために、記号のように言語を操作することが難しい。外国語は語感には欠けるところがあるが、その代り、より純粹に言語で考えることができる。ゆっくり一語一語を吟味しながら未知の世界へ入って行く努力もなしやすい。純粹なベーター理解には数学のような言語を考える必要があるが、外国語や古典語は、母国語と数学的言語のいわば中間に位置す

るのである。

古典語としての(注₂)漢学、外国語としての(注₃)英学をふたつながらもつことのできた明治は、ベーター読みとうことからはあるが強固な知識人層があったのは偶然ではないし、その外国理解にしても、あるいは、現代に劣らぬ深いものであり得たのも、ベーター読みが確立しやすい状況にあったことを想像させる。

一世紀を経た今日、漢学はすでに国民的教養の座を降り、外国語はむしろアルファ読みに価値を認める実用語学に変貌して、読解の伝統はいまにも消滅しようとしている。近代日本において④ベーター読みを推進してきた二つの車輪とともに失ってしまったとしてもよいのである。思想がいたずらに卑俗になり、すこし抽象的な表現には読者がアレルギー症状を呈するという現象は当然の帰結である。(注₄)フィロソフィー不在で、わずかに認められる理念も指導性を失っているが、大衆文化の社会において多くの読者が未知を読む力を欠いている以上、いたしかたがないのかもしれない。

(外山滋比古『もの見方』による)

(注1) 妙味——趣。味わい。

(注2) 漢学——漢文学。

(注3) 英学——英文学。

(注4) フィロソフィー——哲学。

問1 線部②、③のカタカナを漢字に直しなさい。

問2 線部A・Bと、文法的に同じものとして最も適当なものを次のア～エの中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

A 「知らず知らずのうちに冗長になった」

- ア 太陽のように輝く。
- イ 準備したのに無駄になった。
- ウ 庭の植木に水をやる。
- エ 長い練習がついに終わった。

B 「経験世界から外へは出られない」

- ア 人に話しかけられる。
- イ 先生が走られる。
- ウ 母のことが案じられる。
- エ そのように考えられる。

問3 線部①「噛む喜び」とありますが、これは何を表していますか。指示された字数で、次の□にあて

はまる言葉を考えて入れ、説明を完成させなさい。

三十字以内 ときの充実感。

問4 本文中の 、 には相互に対義語になる語があてはまります。それぞれ本文中から二字で抜き出して答えなさい。

問5 ———線部②「ベーター読みの手引にはなりにくい」とありますが、それはなぜですか。最も適当なものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

- ア 絵が主体となって進行するために、セリフとして書かれている言葉や文章などを深く読み込むことがほとんどなく、多少のわからない部分があっても気にせず読み進めてしまえるから。
- イ 書かれている内容のほぼすべてが絵によってわかりやすく示されていることで、読み手が言葉をもとにして自ら情景などを心に描く必要性が少なく、未知を読むことには至らないから。
- ウ 一目でわかる絵というものがページを占めているので、どのような内容の本を読んでいるかがすぐ親にわかってしまい、隠れ読みというベーター読みの刺激が得られにくくなったから。
- エ 絵の魅力だけで夢中になるほど面白いものが多く、言葉や文章の奥にある意味をじっくり考えないまま絵の勢いに引っぱられて一気に読み終わり、内容をそのまま忘れてしまいがちだから。

問6

——線部③「本当のベーター読みができない読者を相手にしては、文学も虚構の中を大きく飛びまわる事ができなくて、現実に足をひっぱられがちになる」とありますが、どういうことですか。最も適当なものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

- ア アルファ読みもベーター読みもできるというのが文学の強みだったが、深読みなどはせずに書かれたありのままを素直に読むのがよいという主張が多くなり、ベーター読みができない表面的な作品が増えてきたこと。
- イ 文学では深い意味を持つ言葉の価値が高いが、現実では読んだときの実感が尊重され、より深くベーター読みをすることで最初の感動が損なわれることを嫌がる読者が多いので、あまり複雑な作品は好まれないこと。
- ウ 文学少年少女がいくら増えても、まだ本当のベーター読みができるレベルには達していないため、彼らに理解できる難易度に抑えるための規制が必要となり、少年少女の現実を舞台にした作品になりがちなこと。
- エ 現実にはないものを構築した虚構はベーター読みができない読者には理解できず正當に評価されることがないため、既知の情報や出来事・人間関係を用いた、内容に入り込みやすい作品にしなければならなくなること。

問7

——線部④「ベーター読みを推進してきた二つの車輪」とありますが、なぜこのように言えるのですか。指示された字数で、次の にあてはまる言葉を考えて入れ、説明を完成させなさい。

漢学と英学は、 四十字以内 ものだから。

このページには問題はありません。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

雄貴は「オジイ」と一緒に、ダイビングに興味をもっている「おじさん」の話を聞いている。

雄貴は初めておじさんの顔を正面から見た。定年を過ぎているということは、オジイと年は五つも変わらないはずだが、うんと若々しく見えた。肌の色が白いからかもしれない。

「うーん、気象庁の人？」

彼は雄貴に④につこり笑いかけてくれた。

「ああ、惜しいね。気象予報士じゃないけど、たしかに僕は空の仕事をしていたんだ」

三人は、空を仰いだ。⑤トンビが大きく円を描きながら、旋回している。ピーヒョロロ。

雄貴は思い切って言ってみた。

「ひよつとしてパイロット？」

「そう。⑥よくわかつたね」

①雄貴はあわてて釣竿つりざおのほうに視線を戻した。

パイロットだって。パイロットだって。聞きたいことはいっぱいある。けれど、そうするとオジイの機嫌がきつと悪くなる。日頃から、雄貴が空のことに興味を持っているのが気に入らないのだ。自分と同じように、海の男に育てほしいらしい。

彼は慎重に言ってみた。

「おじさんは、海のことばかり聞くけど、空のことも少し話してよ。パイロットって楽しい仕事？」

「うーん、純粋に『ああ楽しい』『ロマンを感じるなあ』、そんなことを思って飛んでいたのは、最初に訓練を受けていた頃だけだったかな」

「じゃあ、途中からつまなくなったの？」

正直、雄貴はちよつとガツカリした。でも、^②このおじさんは信頼できる人なんだ、と思った。子供を喜ばせようとして、思ってもいないことを適当に言う人つけてけっこう多いから。

「いや、つまらないってわけじゃないんだ。ただ、本物のパイロットになったら、責任があるからね。君は飛行機に乗ったことがあるかい？」

「うん、あるよ。去年の夏だつて、オジイのどこに行くときに」

「なら、わかると思うな。もし君の乗っている飛行機のパイロットが『わあ、きれいな雲だなあ』なんて、一時間くらいわくわく見とれてたらどうする？」

「それはちよつと困るよ。管制塔と交信してちゃんと（注）ランディングのことを考えてくれないと」

こつそり読んだ航空雑誌の知識を駆使して答えた。このおじさんに、何も知らない少年だと思われるのは不本意だ。おじさんは^①くすつと笑つて答えた。

「だろ。お客さんの命を預かっているからね。うっとり空のロマンに浸つてるわけにはいかないんだ」
「そうか」

^③雄貴は考え込んでから続けた。

「でも、まだ練習をしていた頃は楽しかったんだね？」

「うん。初めて乗ったのは、パイロットを育てる学校で、訓練を受けたときだよ。もちろんでかいジェット機なんて、なかった。ちつぽけなプロペラ機さ。エンジンの音が頼りなくて、このまま停止したらどうするんだろうって、隣の教官の顔を盗み見たりしていたよ」

こういう話を聞くのは初めてだ。というより、本物のパイロットに会うこと自体初めてだった。同じ五年一組に順平^{べい}という子がいて、パパがパイロットらしいけれど、家へ遊びに行くほどの仲じゃないから、当然お父さんとも会つたことがない。

「どうだった？ 自分で空を飛ぶってどういう感じ？」

「小さい飛行機だったから、しつかりコントロールできる気がしたな。操縦桿^{かん}をぐいと引けば、高く飛び上がるんだ。

^④青空をこの手にしつかり握^{つか}んだ気がしたよ」

「そのまま、ずうっとずうっと空の奥まで行きたくならなかった？」

雄貴は、オジイに ^A 気兼ねするのでも忘れてしまっていた。聞きたいことは山ほどあるんだ。

「そうだね。最初の練習の頃は、そう思ったな。虹が見えたら、その下をくぐってみたかったし、空にちぎれ雲が浮いていたら、それを追いかけてみたかったし。教官がいるからそうもいかないけどね」

雄貴がくすくす笑っていると、オジイが ^B 水を差した。おじさんが孫の気持ちを掴んでしまったのが、ついに我慢できなくなったらしい。

「でも楽しいことばかりじゃないだろう。① あんたは海を相当警戒しているようだが、ワシとしては空のほうが恐ろしいぞ。沖縄に住んで何が嫌かって、葉山へ来るたび飛行機に乗らにやならんことだ。よく言うだろ。あんな鉄の塊がどうやって空を、てな。ワシもまったく同感だ。危険な目に遭ったことないかい」

彼は本当に飛行機が苦手だった。雄貴は一度、沖縄から羽田^{はねだ}まで一緒に帰ってきたことがあるが、そのときのオジイは気の毒なほど青ざめて目をつぶったままぴくりとも動かず座っていた。

「危険なこと。そうですね……」

おじさん、あんまり言わないで。もうオジイは二度と飛行機に乗れなくなっちゃうから。雄貴は、通じるかどうかわからないけれど、ぱちぱちと目配せして見せた。彼はすぐに気づいて、オジイにわからないように、微^{かす}かにうなずき返してくれた。言葉を濁すおじさんのかわりに、オジイが言う。

「こないだ乗ったときもエライ目に遭ったぞ。急にガタガタガタ揺れるんだ。横だけならいい、縦にもドーンとさ。ホントはションベン行きたかったのに、それどころじゃなく座席にしがみつくしかなくてよ。雲ん中ならわかるが、真っ青な空だから、なおさらおっかなくて」

「乱気流ですね。④ 海のなかと多分同じなのではないでしょうか。潮が思わぬ流れを作っていることってあるでしょう？ それと一緒に。空にも、そういう空気の流れがあるんです。できるだけ避けるようにはしているのですが、何しろ目に見えないものだから、避けきれない場合もあるわけですよ」

「そうかそうか。空と海は案外似てるもんだな……。なのになぜだか空ではビクついてしまう。みっともねえな」

オジイは落ち込んでしまったようだ。海では怖いものなしだから、恥ずかしいんだろう。おじさんがやさしく声を

掛ける。

「空を怖いと思う気持ちは正しいと思いますよ」

「そうか？」

「乱気流や雷や嵐や雪や……空には、人間がどうすることもできない自然の脅威がたくさんありますから。そのなかを人が当たり前の顔をして飛べるようになってから、ほんの百年です」

「そうだよな、ライト兄弟って、いつの話だ？」

おじさんより先に答えよう、と、雄貴は怒鳴らんばかりの声で言ってしまった。

「一九〇三年だよっ」

「すごいね、君」

「へへ」

「そう、ライト兄弟が飛行に成功した日から、人はあまりにも急速に空を制してしまっただんですよ。かつての夢は、当たり前のことになった。今では安いチケットを使えば、往復三万円や五万円で海外に行くことができますよね。だから、気流の乱れで飛行機が揺れると『機内食が落ち着いて食べられない』と文句が出る。台風を避けて別の空港に降りると『なぜなんだ』と空港職員に食ってかかる人もいる。忘れてしまっているんです。自分が持って生まれた力では行けないはずの空間にいる、ということ。だから、乱気流を恐ろしく思う、というのはむしろ人間として本来自然な感覚ではないかと」

⑤ 彼の言葉で、オジイはすっかり元気を取り戻したらしい。

よしのまりこ
(吉野万理子『雨のち晴れ、ところにより虹』による)

(注) ランディング——飛行機などの着陸。

問 1

~~~~~線部 A・B の本文中における意味として最も適当なものを、次のア～エの中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

A 「気兼ねする」

- ア 相手の言葉をさえぎって自分本位の振る舞いをする
- イ 相手を喜ばせようと思つて発言する
- ウ 相手の思惑を考えて気遣いをする
- エ 相手を無視して自分の考えを通そうとする

B 「水を差した」

- ア 自分の意見を強く主張して気に入らない相手の話を否定した
- イ 話の盛り上がりやよい雰囲気邪魔になるような言動をした
- ウ 自分がのけ者になっているように感じて突然話に割り込んだ
- エ 楽しそうな状況の中に自分も加わりたくて余計なことをした

問 2

——線部①「雄貴はあわてて釣竿のほうに視線を戻した」とありますが、この表現から読み取れる「雄貴」の心情はどのようなものですか。指示された字数で、次の□にあてはまる言葉を考えて入れ、説明を完成させなさい。

四十字以内  
□ という心情。

問3 ———線部②「このおじさんは信頼できる人なんだ、と思った」とありますが、「雄貴」はなぜこのように思ったのですか。四十字以内で説明しなさい。

問4 ———線部③「雄貴は考え込んでから」とありますが、「雄貴」はどのようなことを考えていたのですか。最も適当なものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア 「おじさん」はパイロットとしての責任について真剣に考えているような真面目な人なのに、これ以上自分の興味本位な質問を続けていかまわらないのだろうかということ。

イ パイロットの責任のことなど当然の知識だったのに、うっかり尋ねてしまつて恥ずかしかったので、名誉挽回かいをするにはどのような質問を続けるべきだろうかということ。

ウ 聞きたいことはいっぱいあるが、全部を聞くことはとてもできないに違いないので、次はどの質問をすればよいかの優先順位をどのように決めるべきだろうかということ。

エ 「おじさん」の言うパイロットの責任についてはよくわかるが、やはりパイロットの楽しい部分について聞きたいので、どのようなことを聞くのがよいらうかということ。

問5

——線部④「海のなかと多分同じなのではないでしょうか」とありますが、このときの「おじさん」の様子として最も適当なものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

- ア 乱気流の恐ろしさについて専門的にならないように説明することに難しさを感じていたが、「オジイ」は海について詳しいので、海のなかと比較して話せばよく理解してもらえるかもしれないと期待している様子。
- イ 「オジイ」に飛行機が危険だとあまり思わせたくないらしい雄貴の気持ちを察していたので、海と同じだという話し方をする空を飛ぶことへの「オジイ」の恐怖感を和らげられないだろうかと試みている様子。
- ウ 海のなかのことは詳しくないが、「オジイ」に話すときは海と関連づけることで反発や否定的な感情を抑えられると気づき、無理をしても海のなかと同じだというように話を持っていこうと努めている様子。
- エ 雄貴の気持ちに応えるためには何を話せばよいかと戸惑っていたが、「オジイ」の方から話題を絞ってくれた上に、海と関連づけることができる内容だったので、安心して気軽に自分の知識を披露している様子。

問6

線部⑤「彼の言葉で、オジイはすっかり元気を取り戻したらしい」とありますが、このときの「オジイ」の様子として最も適当なものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア 海に関しては恐れを知らずに立ち向かっていけるのに、飛行機を恐ろしく感じておびえてしまう自分を情けなく感じていたが、その気持ちがむしろ正しいという言葉を聞いて、劣等感から解放されている様子。

イ 海の男に育ってほしい雄貴に空の楽しさを教える「おじさん」に不快感を抱いていたが、空への恐怖感を自然なこととして肯定されて気分がよくなり、「おじさん」への気持ちが好意へと変わっている様子。

ウ 自然の脅威がたくさんある空を人間が当然のように飛べるようになってから、まだほんの百年しか経っていないことを知り、そんな未熟な技術しかない飛行機に不安を抱くのは当然だと開き直っている様子。

エ 飛行機が安全に飛ぶのを当たり前だと感じて、揺れると文句を言ったり台風を避けると怒ったりする人々と比べれば、自分の方がずっと正確に空の脅威を理解しているとわかって、誇らしく感じている様子。

問7

線部②③④にあるこの文章の表現の特徴について説明したものとして適当でないものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「②につこり」「③くすつと」など多くの擬態語や擬音語が効果的に用いられており、直接は述べられていない登場人物の心情が、それらによって間接的に読み取れるようになっていいる。

イ 雄貴がパイロットの仕事に興味を抱く様子が描かれているが、「④トンビが大きく円を描きながら、旋回している」という表現は、雄貴が「おじさん」に対してまだ緊張していることを示している。

ウ 会話を中心にしており、「⑤よくわかったね」「⑥あんた」などの互いに対する話し方の違いによって、登場人物たちの上下関係や好意の有無、心情の変化などがうまく表現されている。

エ 「⑦青空をこの手にしっかり掴んだ気がしたよ」という比喻表現によって、おじさんの心情が聞き手である雄貴、ひいては読み手である私たちにイメージしやすいように工夫されている。

このページには問題はありません。

### 三

次の文章は、『枕草子』の一部とその現代語訳、及びそれについての解説文です。これを読んで、後の問いに答えなさい。

(注1) 陰陽師おんやうしのもとなる小童こわらわべこそ(二八一段)

陰陽師のもとなる小童べこそ、いみじう物は知りたれ。(注2) 祓はらなどしに出いでたれば、祭文さいもんなどよむを、人はなほこそ聞きけ、ちうと立ち走りて、「酒、水いかけさせよ」とも言はぬに、しありくさまの、例知り、いささか主しゆうに物言はせぬこそうらやましけれ。さらむ者がな、①使つかはむとこそおぼゆれ。

(現代語訳)

陰陽師のもので使われている小さな子供ときたら、何でもよく心得ている。陰陽師と祓はらえなどしに出かけると、主人の陰陽師が祭文(祓えの主旨を書いて、神に読み上げる文章)などを読むのを、他の人はただぼんやりと聞いているだけだけれど、その子供はすばやく走り回って、陰陽師が「酒、水を注ぎかけなさい」とも言わないうちに、やってのけてまわる様子がいかにも作法をわきまえている。少しも主人に余計な口を利かせないで済ませるところが全くうらやましい。ああいう気の利いた子がいないものかしら? 使つかつてみたい、とまで思われるわ。

(解説文)

② 気の利く人間が活写されている点が見どころ。現実には、なかなか気の利く人間はいない。だから、清少納言せいしょうなごんの目に留まったのです。陰陽師と小童との関係に、③ 主従関係のあるべき姿を見ているのです。

清少納言と中宮定子ちゆうぐうていしとの関係は、まさに、ここに描かれた小童と陰陽師との関係と同じ。それは、この章段の直前の「雪のいと高たかう降りたるを、例ならず御格子みこうしまるりて」(二八〇段)から、うかがえます。

雪が高く降り積もっているので、女房たちは昼間ではあるが、格子を下ろして火鉢に火を入れて部屋を暖めている。すると、中宮様が「少納言よ、(注3)香炉峰の雪は、どんなふうかしら？」とおっしゃる。清少納言は、さっそく女官に(注4)格子を開けさせ、自分は簾を高く上げて、中宮に雪景色をご覧に入れる。

中宮は、せっかくの雪景色なのに、格子を閉め切っている無粋さに対して婉曲な注意を与えていたのです。清少納言は、中宮の問いかけから、(注5)白楽天の「遺愛寺の鐘は枕を敲て聴き、香炉峰の雪は簾を撥げて看る」の句を思い浮かべ、④中宮の意向を瞬時に理解して、ただちに行為に表した。他の女房たちも感心したという話。有名な章段ですね。

⑤この章段から清少納言は自慢屋と言われてしまっています。確かにそういう面も否定できません。でも、見落としてはならないのは、「香炉峰」の話の直後に、ここで採り上げた陰陽師に仕える小童の話が続いていることです。清少納言が「香炉峰」の話でも、言いたかったことの一つは、仕える者のAだったと思えます。主人の意向をいちはやく察知する力です。清少納言はそうした気働きがあったからこそ、中宮に愛されたのです。

現在でも、上役に気に入られる部下がいます。そういう部下は、観察してみると、上の意向をすばやく察し、指示される前にすでに行動に移している人間です。ま、向き不向きがありますから、そうしろと言われてもできない人間も多いのですが、清少納言の指摘は、現在の上司と部下の関係にも通用するBを持っています。

(山口仲美『やまぐちなかみ』「すらすら読める枕草子」による)

(注1) 陰陽師——古代日本で占いや暦の作成、天文観測などを行っていた人。

(注2) 祓——神に祈って災いを除くための神事。

(注3) 香炉峰——現在の中国江西省北部にある山。

(注4) 格子——細い角材を縦横に組んだ戸。

(注5) 白楽天——中国の唐の時代の詩人。白居易。

問1 ——— 線部① 「使はむ」の読みを、現代かなづかいを用いてすべてひらがなで答えなさい。

問2 ——— 線部② 「気の利く人間が活写されている」とありますが、その具体的な様子を『枕草子』の中から三字で探し、最初の五字を抜き出して答えなさい。

問3 ——— 線部③ 「主従関係のあるべき姿を見ている」とありますが、清少納言が見ているのはどのような姿だと筆者は述べていますか。指示された字数で、次の 



、



 にあてはまる言葉を解説文中から抜き出して入れ、説明を完成させなさい。

従者が 



 して、



 できているという姿。

問4 ——— 線部④ 「中宮の意向」とありますが、具体的にはどのような意向だったのですか。四十字以内で説明しなさい。

問5 線部⑤「この章段から清少納言は自慢屋と言われているとありますが、その理由として最も適当なものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

- ア 女官には格子を開けさせるだけにし、白楽天の句に直結する簾は自分で高く上げて意気揚々としているから。
- イ 白楽天の句についての教養があり中宮の期待に応えられたという自分の成功談を、わざわざ書いているから。
- ウ 身分の高い中宮と自分との間に他の女房たちにはない特別な親しさがあったことを、吹聴した章段だから。
- エ 自分の主人の中宮について、文芸の造詣や間接的な意向の伝え方ができる素晴らしさを自慢した章段だから。

問6 Aにあてはまる言葉として最も適当なものを、解説文中から三字で抜き出して答えなさい。

問7 Bにあてはまる言葉として最も適当なものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

- ア 統一性
- イ 感受性
- ウ 普遍性
- エ 独自性

問8 『枕草子』と同じ時代に成立した作品ではないものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア へいけ平家物語
- イ たけとり竹取物語
- ウ げんじ源氏物語
- エ こきん古今和歌集